

## CONTENTS

巻頭座談会 国際文化交流の新しい流れを探る	1
エッセイ 「地域文化ぞ国際交流」 御厨 貴	6
インタビューシリーズ第13回 第19回 国際交流基金地域交流振興賞 受賞インタビュー 音楽祭で市民に活力を 武生国際音楽祭 山本 有一郎	8
和紙の魅力の世界にPR アーティスト・イン・レジデンス「美濃・紙の芸術村」 幅 英樹	9
流氷が紋別に与えるもの 北方圏国際シンポジウム実行委員会 青田 昌秋	11
ごあいさつ	12



国際交流基金 | The Japan Foundation

## 巻頭座談会

## 国際文化交流の新しい流れを探る

コーディネーター：榎田 勝利（愛知淑徳大学教授）

出席者：園山 土筆（劇団あしづえ代表）

吉富 志津代（多言語センターFACIL/ワールドキッズコミュニティ代表）

岡崎 夢子（高知商業高等学校卒業生）

小川 忠（国際交流基金国際交流相談室次長）

## 友好親善から多文化共生へ

小川 1970年代後半以降、「日本の国際化」が強調されるとともに、全国的に国際交流団体の設立が相次ぎました。しかしグローバル化を経験して、国際化という言葉が持つイメージも複雑になり、90年代の半ばからは、さらに中央政府や地方自治体の財政が厳しくなると、国際交流団体を整理統合しようという動きも見られるようになってきました。また国際交流基金は、去年10月に特殊法人から独立行政法人に生まれ変わり、「国際友好親善」からさらに踏み込んだ「文化その他の分野における世界への貢献」と、その目的の一部が変わりました。大きな転換点に来ている国際交流ですが、本日は、2002年度地域交流振興賞を受賞した3団体の代表者と、

選考委員会の委員である榎田教授とともに新しい可能性を探りたいと思います。

榎田 私は70年代から国際交流に関わっていますが、当時、東京や大阪などの大都市に収まりきれない留学生たちが地方都市にどんどん流れただけで、各地で住宅問題や偏見など、さまざまな問題が表面化しました。それまで民間が個別に地域の国際交流や活動をしていたのですが、自治体が参画することになった。そして70年代後半から80年代にかけて、急速に行政が地域とリンクすることを余儀なくされる。ところが、自治体では限界があることを認識する。また国際化を進めることで、地域住民の意識にも大きな変化があり、従来の友好親善ではなく、地域に住んでいる外国人、異文化を持つ人たちといかに仲よく交流するか、といういわゆる多文化共生が大きなテーマだということに気がつきは



第19回国際交流基金地域交流振興賞授賞式



えのまだ かつとし  
榎田 勝利

#### プロフィール

愛知淑徳大学文化創造学部教授。南山大学外国語学部卒業後、名古屋国際センター交流事業課長を経て、米国ポインツ・オブ・ライト財団客員研究員、国際交流基金日米センター専門員として活動。1995年より現職。アジア車いす交流センター理事長、ニカラグアの会代表、Institute for Global Learning代表。著書に『ボランティアの鍵貸します』（編著）『ボランティアが変える世界』（監訳）『国際交流入門』（監修）など。

じめたというのが現状だと思います。その他、青少年交流、地域の特性を生かした交流というテーマも重要だと思います。

それでは、最初に自己紹介と、その活動をすすめるきっかけなどを聞かせてください。最初に岡Fさん、どうぞ。

岡X 去年、高知商業高校を卒業して、現在は早稲田大学の教育学部で勉強しています。高知商業高校の生徒会では、地域の人も一緒になって国際交流活動にも携わっていきこうと、ラオスに学校を建設し、またラオスの素晴らしさを伝えるためラオスに出かけて商品を買付け、高知のはりまや橋商店街にある店舗で商品を販売することでラオスの支援をしています。最初、商店街にその話を持っていったときは、すぐに受け入れられたわけではなく、商店街の実態調査や街頭アンケートをとったりしました。

私は2年と3年のときにラオスに行きましたが、2回目に行ったときに、改めてラオスを通して自分の国が見えたのです。ラオスの子どもたちは、観光客に物乞いをしたりする現実もあるなかで、将来の夢を熱いまなざしで語ってくれるのです。そういう子どもたちのパワーを見て、「ああ、日本の私たちはどうなのかな」というふうに考えました。日本にないひたむきで純粋なものをラオスに見たのです。これは自分だけが取り入れて還元していくのではなく、地域にももっと密接に広めていきたいと思ったのです。

3年生のときに高知のまちづくり委員会が発足し、その委員会に私も出席し、委員会の協力を得て買付けたラオスの商品を売る店を開くことになりました。そしてお店を3カ月間やりました。そのとき地域の方々とも交流ができ、売り上げも上がって、ラオスに学校を建てる基金に回すことができました。しかしもっと継続した活動をしたいということで、現在は、商業高校でラオス協力活動に関わった卒業生がBRAINという団体を作って、高校生ではできない部分を補佐しながら、活動を継続しています。私もこの団体に入っていて、ラオスの小学校に送るものを集めたり、商品開発をしています。卒業生が入ってだんだん人数も多くなり、2003年にNPO法人の認証を受けたので、さらに活動も広がってきています。

榎田 法人まで作るとは、高校生ながら起業家精神ですね。では次に、ベンチャービジネスに賭けている吉富さん、お願いします。

#### 大きなショックが地域を変える

吉富 私は、スペイン語が専門で、1990年に入管法の改正があったとき、神戸にある南米の領事館で勤務していました。日系南米人がどっと日本に入ってきた時期ですが、たちまち領事館は駆け込み寺のような状態になったんです。つまり、人手不足だからということで、受け入れ準備もせずに入国を受け入れたので、いろいろな場面で混乱が起きた。それを相談できるところもなかったので、言葉が通じる領事館などに、あらゆる電話が殺到したのです。対症療法的に生活ガイドブックを作りましたが、両方のニーズがあって日本に働きに来ている人たちが、なんでこんなに暮らしにくいだろうと疑問を持っていたところに、阪神淡路大震災が起きたんです。

阪神淡路大震災は、どんな言葉をしゃべろうが、皆同じように被害を受けたのです。日本で暮らしていた私たちがさえも混乱したのに、言葉がわからない人たちがどんなに不安な気持ちだったかは、想像できますよね。その大混乱の中で、情報を得られない人にどうやって情報を提供するかが急務となり、即座にネットワークができたんです。また、同じ地域住民として同じベースで生きられるような町にしましょう、交流を超えて、一緒に生活しましょうという活動なのだと思います

「たかとりコミュニティセンター」には7つの団体があり、私は多言語の翻訳、通訳をするコミュニティビジネスと、子どもたちのためのワールドキッズコミュニティというNPOを運営しています。違う文化や言葉を持った子どもたちが地域の学校に入ってきて、その子が萎縮してしまうような今の教育環境を変えれば、日本の子どもたちにとっても、もっと楽しい環境になるからみんなで考えましょう、という活動です。榎田 ありがとうございます。では園山さん、



ラオスで子どもと交流する高知商業高校の生徒たち



FM わいわいの番組「まちはいきいき きらめきタイム」収録中



お願いします。

園山 「劇団あしづえ」というアマチュアの演劇団体です。38年前に結成し、旗揚げ公演のときに、商店を1軒1軒回って広告取りをしていたときのことで。『うちのようなおめでたい商品を売る店にお前たちのような縁起でもないものが来て、汚<sup>けが</sup>らしい』といって塩をまかれてしまいました。そのときに、なぜそこまでされなければいけないのかと強く思いました。それで長い時間をかけてだんだんと、演劇ができる環境をもっとよくしていきたいと思うようになったんです。やがて自分たちがやらなくて誰がやるんだ、という当事者意識が熟成していきました。そして1995年に初めてアメリカの国際演劇祭に参加したんです。思いがけず一席になったのですが、そこでホームステイの体験、言葉が通じないつらさ、文化の違いによって上演していく芝居の中身が違うこと、観客の違い、さらに感動される場面が違うというような大きな経験をしました。その素晴らしい体験を与えてもらったことに感謝して、今度は自分たちが主催者となって多くの人たちとそういう体験を共有したいという思いが、国際演劇祭を始めようとしたきっかけです。

ちょうどそのころ松江市から隣の八雲村という人口7000人の小さな村に、劇場を建てるために引っ越したわけです。よそ者ですから大変でした。松江市と八雲村では文化が違うんです。会合を開いても、下手に発言すると、いろいろな軋轢<sup>あつれき</sup>が生まれてくるので口を開かない。そういう地域にいて、人々の暮らしの中に本当の意味で演劇を浸透させるにはどうしたらいいのか、海外で体験したことを、どうやって伝えていくのか悩みました。しかし変わらない地域を変えようとするときは、大きなショックを与えること。小さなショックでは何も変わらないのです。ですから国内的なものではなく、国際的な演劇祭をするという、あえてしんどいことをやりた



第1回八雲国際演劇祭の開会式

いと思いました。そういう大きなショックを与えたときの跳ね返りもものすごく大きいのですが、でもそこでやっと少し変わっていくということを、長い劇団活動で体験していました。

最近、「国際交流」という日本語が壁になっていると感じるようになりました。「国際交流」という言葉では、お互いがきちんと確かなものをつかむまでに至らない感じを受けるのです。ですから99年から、八雲国際演劇祭では「国際交流」ではなく「国際理解」という言葉を使っています。「国際理解」は「国際交流」からもっと進んで、お互いの違いをわかって、その違いを乗り越える方法を見つけだし、共に努力していくことと考えています。けれども、最近では「国際理解」よりも「多文化共生」というほうが、よりよいのではないかと考えています。いずれにしてももっとぴたりする言葉を当てはめる時期にきているのではないのでしょうか。これからはそういった言葉の定義付けをきちんとしていく必要があると思います。

小川 私たちも共通の問題意識を共有したり、共同作業をすることが、自分たちの活動だと思えるようになってきました。

### 地域とともに歩む

榎田 国際交流を本当にやってきたのかということが問題ですね。協力はできても、対等な関係でないと交流は成り立たない。今まではどうも理念なき国際交流らしきことをやっていた。その典型が、友好親善の交流だった。吉富さんのところはどうですか。

吉富 私たちにはまず「共死」があったんです。共に死ぬ。そこから始まっているので、交流とは全然別のところから始まったと思いますね。みんな一緒に被害を受けた。東南アジア出身と思われる男性がおばあちゃんと一緒に「水、どうぞ」ってやって、そこから共生を考えた。多文化共生というのはあの頃にできた言葉ですね。本当は、多文化調整<sup>よ</sup>なんです。

講演などに招かれて話をする機会がありますが、まず外国人って何ですかって質問をするんです。多文化は外国人のことだけじゃない。園山さんがおっしゃったように、松江と八雲でも違うんです。人それぞれ全部違うということを理解してほしいですね。

榎田 たかとりコミュニティセンターは、地域住民にはどう受け取られているんですか。



そのやま 園山 つくし 土筆

### プロフィール

劇団あしづえ代表。「八雲国際演劇祭」マネジング・芸術監督。1966年、島根県松江市で「劇団あしづえ」を創立。西日本のプロ、アマ演劇集団の演出や劇作、制作を手がけるほか、講演活動や福山女子短大非常勤講師、鳥取女子短大、作陽短大特別講師なども務める。1995年から八雲村の公設民営劇場「しいの実シアター」に活動の場を移す。1999年から3年に一度「八雲国際演劇祭」を開催。演出作品の「セロ弾きのゴーシュ」は、アメリカ、カナダなどの3つの国際演劇祭で第一席となり、演出賞、観客が選ぶ作品賞などを受賞した。



よしとみ しづよ 吉富 志津代

### プロフィール

多言語センターFACIL/ワールドキッズコミュニティ代表。京都外国語大学イスパニア語学科卒業。在神戸アルゼンチン総領事館など中南米の領事館秘書を経て、スペイン語講師やスペイン語での日本語講師に。1990年の入管法改正以来、急増した日系中南米人支援のための生活ガイドブックの監修をする。1995年阪神淡路大震災後、外国人救援ネットワーク（たかとりコミュニティセンター）のメンバーとして多言語コミュニティ放送局「FMわいわい」の設立などに関わる。その後も多言語環境の促進や、青少年育成のためのプログラムを切り口に、外国人コミュニティの自立支援活動に従事。





おかざき ゆめこ  
岡崎 夢子

プロフィール

早稲田大学教育学部学生。高知商業高等学校在学中、生徒会活動として、ラオス学校建設活動に3年間携わる。その間2回ラオスに出かける。3年生で生徒会会長を務める。現在は、同校卒業生としてラオス学校建設を支えるNPO団体BRAINで活動を続ける。



はりまや橋商店街でラオスの商品を売る高校生

吉富 というよりは、私たちは地域住民として活動しています。たかとりコミュニティセンターのある場所は、もともと在日外国人やベトナムの人がたくさん住んでいる地域ですが、自治会長さんはベトナム人が大嫌いだったんですね。ゴミの出し方はめちゃくちゃだし、大きな音でカラオケをやるので困っていたのです。ところが、地震があって一緒に避難所で過ごすうちに、ピンさんとかタンさんとか個人名に変わってきて、そのうちゴミの捨て方のルールは、ベトナム語で書いてなかったらわからへんわになって、地域のゴミの集積場所に多言語の看板を立てるようになりました。このような地域を増やしていかなければならないと思っています。

榎田 岡<sup>f</sup>さん、高校生が国際交流をして、地域とも関わることで、地域に変化はありましたか。

岡× 初めは私たちも商店街や地域のことはまったく知りませんでした。しかしイベントやエコマネーをすることで交流するようになり、私たちも地域のことを知るようになりました。またラオスの学校建設活動をして、地域と一緒に頑張っている高知商業ということで知られるようになり、他の学校からも協力してほしいと頼まれるようになりました。ですから、地域にも理解は広がったと思います。

榎田 園山さんは、八雲村との交流を通して、変化はありましたか。

園山 私たちの演劇祭は、地域住民と八雲村と劇団あしづえという三者が手をつないで、対等な立場でやろうとしています。村長さん以下全員がボランティアで、実行委員会のトップは村民で、村民の下に助役さんや教育長もいるみたいな。合わせると300人くらいのボランティアスタッフが関わっています。そして、何よりも女性の元気がいいですね。若者たちも少しずつ加わっています。ですから徐々に変わってきています。

榎田 女性や若者たちといった、従来のムラ社会で抑えられていた人たちが活躍できる場所ができ、それが起爆剤になって村が変わっていったというのは、国際交流のいい面ですね。

活動の広がり

榎田 やはり大きく変わったのは、外向きの国際交流から、地域の中の国際化をどうするかになったことですね。そしていちばん大きいのは、地域住民の異文化に対する反応というか心の問

題ですね。その場合行政は、団体やNPOなどの力を借りないとできないと思います。行政とパートナーシップを組む場合、何が難しいのでしょうか。例えば高知商業高校は高知市立ですよね。外国まで行ったり、エコマネーを作ってお金を扱うようなことが学校教育の現場で可能となったのはどうしてだったのでしょうか。

岡× 初めのうちは、協力なら募金でいいだろうという声もありました。しかし年月を重ねて理解が広がるにつれて、教育委員会も理解を示してくれるようになり、市長や教育長も一緒にラオスに同行するようになり、地域にだんだんと理解が広まったおかげで、教育委員会も理解を示してくださるようになりました。やはり継続していくことがいちばん大事だと思います。

榎田 継続するのにいちばん大切なことは何だと思いますか。

岡× 新しいものを生み出していく、続けながら発展させていくことだと思います。

榎田 吉富さんのところはまさしくアメーバ状にワーツと活動が広がっていていますね。

吉富 スタッフの数は、うちの団体だけで8人、たかとりコミュニティセンター全体だと30人以上もいますし、それに関わるボランティアがいて、例えば、通訳・翻訳の登録者だけでも300名はいますから、何千単位の人関わっています。1人ずつを大切に、その1人がまた次の人につないで、という人の連携が大事ですね。

課題と解決法

榎田 いま皆さんは、どういう壁に当たって、どう解決しようとしているのかをお話ください。

岡× NPOの団体になったばかりですが、今の私の本業は勉強することですし、ほかの人たちも本業があるため、どうしてもこの活動を中心にやっていくことが難しく、人手不足の問題とか、活動資金に問題があります。またラオスに興味を持ち、関わりたいと申し出てくださる方はいても、それを生かして大きな活動に発展させることができていません。現在は、今後を模索しているというか、行き詰まっているという感じです。

榎田 岡<sup>f</sup>さんは今、どういう関わり方をしているんですか。

岡× 今は東京に住んでいるので、関われないのですが、高知に帰ったときにイベントを手伝ったり、商品開発をしています。



榎田 生徒会はどんな状況ですか。

岡× 地域交流振興賞をもらったことも影響していると思いますが、生徒会は大幅に人数が増え、3年生が引退して現在は21人ですね。現在は株式会社の形態も変えようという動きもあります。それに学校紹介などで、中学校でラオスの話をする機会が多くなりました。そのことがきっかけで、商業高校を受験する人も増えたようです。

榎田 学校のイメージが上がって、受験者も増えた。それはすごいな。

岡× お店をやるようになって、学生が関われないようなところへの紹介をNPOでやるようになったのですが、卒業生はあくまでも生徒の支援をしているという感じですね。NPOになり経理もたいへんなので、手伝っています。

榎田 商業科だからそういうことはできるんですね。では吉富さん、お願いします。

吉富 課題は山積ですが、いちばん難しいのは、組織の維持か、ミッションかというバランスです。ミッションにこだわりすぎると、事業に走れない。だから、事業の内容がミッションとぶれないようにし、さらに経済的に安定させるのはすごく難しい。

ですから、きちんとした雇用ができる経営の経済基盤を作りながら、ミッションがぶれないというバランスをとることが課題です。自分は事業をしっかり持つことが大切だと思います。

また企業とも連携したいと考えています。行政は協働と言いながらも、それなりの制限が出てくる。対等な立場で事業をしているつもりですが、そのバランスも今後の課題ですね。ただ、たかとりコミュニティセンターの場合は、この組織を守ろうという意識があまりなくて、自分たちの目標を達成できたら、やめちゃうんです。柔軟に対応しながらやっています。

榎田 NPOとかボランティア団体が資金的に豊かになったら、ミッション自体が難しくなるから、経済的な苦しさは宿命なのかもしれませんが、運営にあまりにも労力を使って、本来のミッションにも手が回らないような状況がよくある。最近、ある自治体では行政がNPOに対して1000万とか2000万といった金を出すんですが、こうなると委託事業です。そのために職員を雇ってプロジェクトを遂行するわけです。でも、次年度は保証されていない。それはかえってNPOやボランティア団体の、ミッションを崩壊させるきっかけになってしまう。財団や

行政の金の出し方にも考慮が必要ですね。

小川 助成するにしても、芽を育てることを考えなければならないと思いますね。

## ボランティアの受け入れ

榎田 ボランティアについてはどうお考えですか。

吉富 私のようにそれが仕事になっている人がいたり、自分の時間の許す範囲で関わる人がいたり、イベントだけ関わる人がいたり、それぞれ自分で関わり方を決めたいと思うんですね。ただプログラムごとに研修会や報告会、意見交換会をして、それぞれの現状を話し合う機会をつくり、続けるための環境をつくっています。しかしこちらもボランティアのための仕事をつくらなければいけないので、1週間だけ来られてもコピーくらいしか頼めないのが実情ですね。1年間くらい長いスパンをインターンとして受けて、本人にも多少の報酬が出ないと、全体に関わるということにはできない。

また、多文化共生についての論文を書くために関わっている研究者や学生が多いですね。よく電話やメールで問い合わせが来ますが、こちらが説明するのではなく、活動に関わってもらい、人間関係ができてから論文をまとめてほしいと思っています。大学がインターンとして送ってきた大学生に単位を与える場合もありますね。ただ、できるだけ多くの人に関わってほしいと思うので、なるべく丁寧に対応したいと思っています。

榎田 インターンを受け入れる場合、それなりのカリキュラムや評価システムが必要となりますよね。園山さんのところは、いかがですか。

園山 八雲国際演劇祭はイベントではなく、3年をスパンとした長期にわたる活動だととらえていますので、ボランティアスタッフも長期に関わらないと運営できないんです。というのは、演劇祭の意味や特徴を理解してもらっただけでもまる1日かかるし、それを納得してもらったうえでやっていこうとしています。さまざまなディスカッションをしながら、少しずつみんなでレベルアップしています。

榎田 これだけは言っておきたいことなどありましたら、お聞かせください。

園山 私たちの住む地域では、20世紀には、「国際交流」だとか「国際理解」と言っても、それはよその話だったんですね。でも、21世紀になって、急速に世の中が変わってきているなか



ワールドキッズコミュニティ主催のクリスマスパーティー



八雲国際演劇祭に参加した劇団員が小学校を訪問

で、八雲国際演劇祭で学んだ多くの失敗を教訓にしたささやかな知恵が、これからの時代に大きく花開くんじゃないか、と楽しみにしています。吉富 この活動はちょっとやそつとで変わらないし変化も見えてこないと思っています。10年後に振り返ったらほんの少しだけ地域が変わったかなというような、本当に時間のかかる活動だと思っんです。だけど、そのずっとずっと先に、少数者の視点に立った住みやすい「まち」を見据えています。みんながいろいろな文化と接することで、今まで窮屈だったことに気づけば、もっと楽しくなる。そのために、調整や喧嘩をしながらも、この活動を地域で続けていきたいですね。

岡× 私は、高校生として体験したことによって教育の面から国際交流に関わっていきたいと思っています。ラオス学校建設活動は、これからもどんどん広がっていくと思うんですけども、子どもたちがこうした活動を積極的にできるような環境づくりを整えていきたい。皆さんのような活動を子どもたちに伝えていきたいと思っています。

小川 いろいろな夢を持って、その夢を実現するための一つ的手段として国際交流を使っている。国際交流基金も、個人の持っている夢を突

現するため、その後押しをし、夢を共有するためのネットワークづくりと一緒にやっていきたいと思っています。

榎田 国際交流というのは長い時間がかかります。息が長いから、継続させるために私たちはチームやNPOを作る。だから、組織のマネジメントや、ボランティアのマネジメントとかが大きなテーマになってくる。また異文化交流や国際交流は、その原体験を通じて、若者たちに新しい気づきをさせるチャンスでもあると思います。

最後にアメリカにある「W・Eボランティア」を紹介します。Wはウィークエンドで、Eはイブニング。いちばん働き手となる層は、若者たちや、現在仕事をしている人たちですから、その人たちが参加できる時間帯であるウィークエンドと夜にできるプログラムを開発して参加者を募る。ボランティア団体自身が切磋琢磨して日々プログラムを開発していく。今までは善意の人たちが自分の関心の領域で自分の身銭を切っている活動でしたが、もっと社会性に富んでくると、それだけではいけないんですね。市民に対してどう訴えていくか。それに対してどう応えるかということでは、能力的にも、質の高い活動が求められると思います。



おがわ たかし  
小川 忠  
国際交流相談室次長

## エッセイ 「地域文化と国際交流」

御厨 貴

東京大学先端科学技術研究センター教授

地域の豊かな文化や人材を生かして、地域社会がそれぞれ、地球を舞台に国際交流や文化交流を繰り広げている現在、さらに相互理解を深め、平和を維持していくためには、何を共通理解とし、何が必要なのか。国際交流の現場を担う人々が集まり、情報や意見を交換するためのワークショップ「地球が舞台」が今年度3回開催され、活発な議論が交わされている。「地球が舞台」の全体コーディネーターを務める御厨貴氏に、「地域文化と国際交流」について、寄稿していただいた。

みくりや たかし  
御厨 貴

プロフィール

1951年、東京都生まれ。1975年、東京大学法学部卒業。1988年、東京都立大学法学部教授を経て、1989年、ハーバード大学イェンチン研究所客員研究員。1999年、政策研究大学院大学教授、2002年、東京大学先端科学技術研究センター併任教授、2003年より現職。著書に、『オーラル・ヒストリー』(中公新書 2002年)、『東京(20世紀の日本)首都は国家を超えるか』(読売新聞社 1996年)など、編著に『歴代首相物語』(新書館 2003年)などがある。

「地域文化と国際交流」を考えるワークショップが始まった。独立行政法人国際交流基金とサントリー文化財団の協力と共催による「地球が舞台」をキーワードとした一連のイベントである。すでに昨年8月には長野県飯田市、9月には富山県利賀村で開かれ、本年2月に佐賀県武雄市で開かれる。その後、総括的な国際シンポジウムが東京で行われる手筈となっている。

この一連のイベントすべてに、私は総合コーディネーターとして参加している。政治学を専攻する私の参加にいぶかる声があがるかもしれない。しかし私自身は、「地域文化と国際交流」といったテーマは、政治社会学や政治文化論の

領域にピタリ当てはまると考えていた。逆にいうと、フィールドワークなしにこれらの学問領域は成立しえない。だからこそ私は、今回のイベントに先立って、1997年から「21世紀の地域文化の担い手研究会」(サントリー文化財団)の座長を4年間務めた経験を有する。

それにしても、「地域文化と国際交流」の実態はどのようなものであろうか。偏見を恐れずに言おう。何となく「地域文化」は国内に閉ざされたイメージがあるし、しかし「国際交流」と言えば国外に開かれたイメージを当然の前提とする。相互に矛盾するものを、単に“と”でつなげただけなのではあるまいか。



実は2回のワークショップを経験して、こうした先入観はみごとに雲散霧消した。「地域文化」は複層的に展開しながら、「国際交流」に連なり、「国際交流」を踏まえることで、よりダイナミックに変貌をとげる。「いいだ人形劇フェスタ」を通じて、日本全国の人形劇と世界各地の人形劇をつないだ飯田市の事例は、その意味で興味深い。近世以来の人形浄瑠璃の伝統の上に、新たな人形劇を活性化させ、芸術性・専門性と国際性や市民性との接配を飯田市民の話し合いを通じて作り上げてきた意味は重い。今は市民組織が前面に出ることによってリーダーシップを発揮できるようになったが、専門家や行政とのかかわりの中で、ともすればバラバラになりがちな市民をまとめた功績は大きい。ここに飯田市民の良い意味の“政治性”を見ることができる。

この他、飯田のワークショップでは、高知県鏡村の日本の山村文化の再発見、滋賀県八日市市の大風保存会、富山県井波町の国際木彫刻キャンプ実行委員会の事例報告が行われた。いずれも地域の文化事象に興味を抱きその発展に尽力しているうちに、文化が本来持っている“広がる力”が国内よりはむしろ国際的な拠り所を求めて内外文化の共振現象をひきおこし、一挙に国際的色彩を帯びていく、といった印象をうける。基調報告で述べられた、沖縄県佐敷町のシュガーホール舞台創造の例も同様である。

一人、若しくは数人の担い手から始まったものが、やがて組織化の動きを余儀なくされる時、そこには必ずや個人の創意工夫が失われる危機が訪れる。そのまま放置すれば、活性力が乏しくなりマンネリ化し、すべてが沈滞化してしまう。そこで再度の蘇りへの手がかりをいかに見出すかについて、飯田の人形劇フェスタや八日市の大風保存会の事例が雄弁に物語っていたように思う。すなわち、「地域社会と国際交流」が、「地域社会と国際交流」と思える段階に達した時、地域文化再生の課題の大半は達せられるに相違ない。

「地域社会と国際交流」の感を強くしたのは、富山県利賀村のワークショップにおいてであった。ここでは、地域での国際交流、子供達の国際協力、国際交流を経た子供たちのフォローアップと、さらにテーマを個別に明確化して行われた。まずは地域での国際交流の事例は対照的なもの2つ。富山県福野町のスキヤキ・ミーツ・ザ・ワールドは、何とも楽しい、スティー

ル・ドラムによる国際交流だ。10年にわたる実践的試みはまだ終わらない。他方、愛知県豊田市の豊田市国際交流協会の事業は、ベトナム人の事務局長の切り盛りで、すでに大人の風格を十分に備えている。

次は子供たちの国際協力。圧巻は何といっても高知商業高校生によるラオスに小学校を作るというこの10年の活動だ。小学校作りを焦点に文化交流が商業活動にまで拡大しつつ深められていく有様は、まことに感動的の一語に尽きる。これに対して老舗の雰囲気を出していたのが、富山県における「とやま世界子ども演劇祭」の事例に他ならない。伝統を誇る劇団文芸座などが中心になって、大人の視線を子供に移しかえても立派にやりこなせたことがポイントである。

最後に国際交流のフォローアップ。アジア太平洋子ども会議・イン福岡、それに札幌子どもミュージカル育成会、いずれもが子どもを通じた国際交流を実践している。その上で単発的なものに止まらず、国際文化交流の人材養成を目指している点に特色がある。

以上の事例からわかる通り、まことに地域文化と国際交流とは密接不可分の形で発展してきた。その中で市民と行政と専門家が、相互補完的に役割を果たすことが重要なのである。この絶妙なダイナミクスをいかに実現に導くか。これこそが地域住民の知恵のなせる業であり、良い意味の“政治性”の発展に他ならない。「地域社会と国際交流」はこのような含みをもったものとして理解される。

さて、本年2月のワークショップは「地域社会で国際交流」をテーマとする。これまでの事例紹介を一步進め、実践論の手ほどきを視野に入れている。言い換えれば、これから「地域文化で国際交流」を考えている地域住民に対するオープン・スクールの特色を有しているのだ。そしてまた、人に語ることによって自らを客観化するよすがにもしたいに違いない。九州は佐賀の地で開かれる熱い技と心の実践塾、とても楽しみだ。

最終的な国際シンポジウムへ向けての私自身のテーマは早くも決まった。他ならぬ「地域社会と国際交流」だ。古文的言いまわしで、含蓄は深いと思うのだが、はてさて英訳はいかにしたらよしいものか。悩みはむしろこの点にある。ここは国際交流基金スタッフの英知を結集していただく。



「地球が舞台イン飯田」のワークショップ

## 第19回 国際交流基金地域交流振興賞

国際交流基金地域交流振興賞は、国際文化交流事業を通じ、地域における国際相互理解と国際友好親善の促進に貢献した団体と個人を顕彰するものです。昭和60年度から毎年授賞を行っており、これまでに55団体が受賞しています。19回目となった今年度は、「アーティスト・イン・レジデンス『美濃・紙の芸術村』実行委員会」(岐阜県)、「武生国際音楽祭推進会議」(福井県)、「北方圏国際シンポジウム実行委員会」(北海道)の3団体が選ばれ、2月9日(月)に授賞式が開催されました。岐阜県、福井県では初の受賞です。そこで、地域における国際文化交流をどのような形で進めてきたのか、各団体の代表者にインタビューし、それぞれの事例を語っていただきます。

山本 有一郎

(武生国際音楽祭推進会議事務局長・歯科医師)

## 武生国際音楽祭 音楽祭で市民に活力を

### 団体概要

武生国際音楽祭推進会議

代表者：理事長 上木 雅晴

設立年/設立地：1990年/福井県武生市

ホームページ：<http://www.necsoft.co.jp/takefu/2003/index.html>



武生市文化センターでの演奏風景



音楽祭開催中に行われる街中コンサート

### さまざまな変遷を経てきた音楽祭

韓国人の作曲家、スイスの弦楽四重奏団、ドイツのソリスト集団、日本の和楽器奏者……。人口7万人の福井県武生市<sup>たけふ</sup>で昨年6月に開催された「武生国際音楽祭2003」には、内外から100人以上の演奏家が招待され、8日間にわたり演奏活動が行なわれた。開催期間中は、1200名収容できる武生市文化センターでのメインコンサートをはじめ、中学校や小学校、お寺の本堂、レストラン、街角スペースなどで40回を超える演奏が行なわれ、町中が音楽祭の雰囲気でも盛り上がる。この大きなイベントを支えているのが、約60名の市民ボランティアだ。「武生国際音楽祭」は、その前身である「フィンランド音楽祭イン武生」を含めると昨年で14回目の開催となり、日本の地方都市で開催される音楽祭のなかでも、質の高い独自性のある国際音楽祭として知られている。

武生市で、初めて国際的な音楽祭「フィンランド音楽祭イン武生」を開催したのは、1990年。前年、東京で開催されたフィンランド音楽祭のため来日したフィンランドの演奏家が、1カ月の滞在期間中、次の公演までの空いた日程を利用して、どこかで演奏会ができないか、と探していた。それを聞きつけた武生の住民が動きかけ、翌年から武生でコンサートを開くことにしたのだ。

「武生で演奏をしてもらえば、彼らとコミュニケーションできるし、滞在してもらえば、経済的な効果も期待できると考えたんです。だ

が、資金の調達ができないので、市に協力を依頼。ほかにも地元の企業やメセナからの補助金を運用して開催の運びとなった。「武生市文化センターが事務局となり、商工会議所や青年会議所、ピアノの先生など各方面の30名からなる実行委員会を作りました。新しい形の地域事業をやろうと意欲に燃えていました。しかし市の主導ということで、なかなか話がまとまらない。最後は、個人の意見が尊重されるなど、実行委員会のあり方に問題がありました。」

1週間のコンサートの集客にも不安があったが、初めての音楽祭トータルで8000人を集め、盛況のうちに終わった。「楽器を持った外国人が自分たちの町を歩いている光景は、市民にも大きなインパクトを与えましたね。それで、最初から続ける予定ではなかったのですが、また来年、今度は民間主導でやればもっと面白くなる、という声が出て、第2回目を開催することにしたのです。」

2回目は、意志を持って参加する個人の実行委員会にしようと、40人の実行委員会を作って準備を始めた。ところが「一部の人が勝手に好きなことをやっている」という市民からの批判が上がった。3回目は、名称も「武生国際音楽祭」と改め、世界の音楽を演奏する武生独自の音楽祭を計画。また単年度で決めていた実行委員会も、継続的な推進会議に変更。理事会を作り、もっと市民に参加してもらうために地元の有力者にも理事になってもらった。5回目は、地元の中高生のプラスバンドや合唱団にも参加を要請。そして9回目となった1998年からは、毎年テーマを持たせることにし、さらに

2000年からは作曲セミナー（2001年から武生国際作曲ワークショップ）を始めた。

### 市民の活力となる音楽祭をめざして

形を変えながら続けてきた音楽祭だが、それを支えるボランティアの熱い気持ちに変わりはない。準備は毎年前年の12月ごろから、レストランなどの出前コンサートや演奏会をする学校選び、ポスター、チケット作りが始まり、4月には広報の開始、5月になるとイベントの準備に入る。「ポスターもチケットもボランティアがデザインを考案して作り、ポスターは日曜日に貼りに行きます。駅から会場までの道沿いを旗で飾るのも仕事です。しかし職場では出会えない人たちと会い、普段とは違う経験ができるから、面白いんです。実は私は音楽に興味がなく、コンサートが始まるといちばん後ろの席で寝てしまうのですが、終わる前には起きて、駐車場の整理をするんですよ。ボランティアには、音楽好きな人も無関心な人もいるが、それぞれの立場で関わることがある。それでも組織作りの勉強になるし、一流の演奏家と話すことができたり、出会いがある。音楽祭との関わりのなかから、各自が魅力のある何かを見つけられればいいです」

音楽祭を続けてきた結果、最近は余剰金ができ、「自己資金があれば、赤字の年があっても穴埋めできると考えて貯めてきたのですが、今考えると余裕は鬼門です。安定はだめですね。危機感があるときには必死になってチケットを売ろうと頑張りますが、気持ちがゆるむとチ

ケットを売らなくなる。それにボランティアを支えるためのボランティアになってしまうんです。というのも、最初のころはまったくの手弁当でしたが、今は夜会合を開くと、ジュースやお茶を用意する。それでは、自己資金を貯めている意味がなくなってしまうんです。ボランティアのあり方を見直す時期でもあるという。

音楽祭の運営に関しても、疑問を持ちながら、壁にぶつかりながらやってきた。「これでいいのかと、いつも不安を抱えてやってきました。しかし2～3年に1回くらい、東京などで行なわれる文化フォーラムなどに出席して、ほかの都市の事例を聞いたり、識者の話を聞くと、今自分たちが向かっている方向が、正しいのか間違っているのかがわかる。そういう確認も必要なんです」

「10年も続けていると、小学校の低学年だった子が中学校を卒業する年齢になっているわけですから、武生国際音楽祭で会った演奏家をめざして、音楽大学に行く子どもや、武生に住みたいという演奏家がいてもいいのですが、まだそこまでは行ってないようです。それにまだ地域住民の理解も充分だとは言えません。この音楽祭が、もっともっとウキウキドキドキとして、明日の活力になるような力強いイベントにしたいのです。今後50年も100年も続けて、音楽祭といえば武生、と言われ、武生で演奏しただけでステータスになるくらいの音楽祭にしたいですね。暗い日本に灯をともしような役割を担っていきたいと思います」。山本さんたちは、理想に向かって、また今年6月の音楽祭の準備を始めている。



小学校でのコンサート

## 幅 英樹

（アーティスト・イン・レジデンス「美濃・紙の芸術村」副委員長・提灯製造業）

## アーティスト・イン・レジデンス「美濃・紙の芸術村」 和紙の魅力を世界にPR

### 団体概要

アーティスト・イン・レジデンス「美濃・紙の芸術村」実行委員会

代表者：委員長 石川 道政

設立年/設立地：1997年/岐阜県美濃市

ホームページ：[http://www.city.mino.gifu.jp/index\\_geijutsumura.html](http://www.city.mino.gifu.jp/index_geijutsumura.html)

### 子どもが外した垣根

「今年は、どんな人が来るんだろう」。市民は秋になると、世界各地からやってくるアーティストを心待ちにするという。「うだつの上がる江戸時代の町並み」と和紙で知られる美濃は、人口

2万5000人の静かな町だ。ここに毎年、和紙に興味を持つアーティストが海外から5～6名招待され、90日間にわたって生活しながら芸術活動を行なっている。「アーティスト・イン・レジデンス」は、アーティストが異なる文化や国に身を置き、ほかのアーティストや地元住民と交流しながら創作活動をする場だ。アーティストた



美濃紙ワークショップ

ちは美濃市の一般市民の家にホームステイしながら、古い家並みが続く旧市街の工房へ通う。

「このイベントを始める前は、美濃市にはほとんど外国人はいませんでしたから、大変でした。最初に来たベネズエラのアーティストが買い物に行くと、みんな話しかけられることを怖がって逃げちゃうんです。彼女は、スペイン語しか話せなかったので、こちらも心配で、名前と電話番号を書いた札を持ち歩いてもらいました。」

第1回目に招待したアーティストのうち、ベネズエラの女性とフランスの女性は、たまたま子どもを連れての滞在だった。短い期間だったが、教育委員会の配慮で、子どもたちはそれぞれ小学校と保育園に通えるようになった。「子どもは、言葉が通じなくても意思の疎通ができるんですね」と幅さんが感心するように、子どもたちはすぐに打ち解けた。身振り手振りで気持ちを伝え、一緒になって遊ぶ。休み時間に子どもたちが集まっているので、何かと思ったら、日本人の子どもたちがアーティストの子どもから新しい遊びを習っていたこともあった。先生も辞書を片手に奮闘し、家で子どもから話を聞いた親たちの要請で、今度はフランス人の母親が、PTAでフランスの子育てを紹介したりと、交流は自然に広がっていった。「最初の年に子どもと一緒に来日したために、外国人アーティストと市民の垣根がうまく外れました。そして回を重ねるごとに、市民も慣れてきて、毎日工房へ通うアーティストたちと挨拶を交わしたり話をするようになりました。」

美濃でこの試みが始まったのは1997年。日本三大和紙の一つである美濃和紙を生かした作品をアーティストに作ってもらい、美濃和紙のPRにつなげたい、と5年計画で始まった。外国人アーティストの受け入れは、市民と触れられるようにとホームステイで、伝統的建造物の指定を受けている江戸時代の町並みにある和紙問屋を借り受け、工房として使用している。来日したアーティストには、まず和紙を紹介し、今まで作られた作品を見せて、それぞれの創作活動のヒントをつかんでもらう。そして滞在中に作った1点以上の作品を市に寄贈してもらう。「和紙を見せると、まず全員が驚きますね。丈夫で薄く、しかも光沢や温かみのある風合いに、和紙自体が作品だって。でもこちらからアーティストから、何かのヒントがほしい。我々が持っている和紙のイメージを打破してほしいのです。」自ら提灯ちようちんを製造する幅さんも、和紙の新たな可能

性を探っている。

### 普段着の日本の生活を見せる

空港への送迎、市内の案内、通訳、機関誌の発行、材料調達の手助け……、慣れない異国での創作活動を支えているのは、40～50名のボランティアだ。工房公開や学校でのワークショップといった事業もボランティアたちが支えている。「1回目には、6人のアーティストが来るたびに歓迎の持ち寄りパーティーを開き、全員がそろったところでもう一度盛大なパーティーをやり、帰りも同じように7回、合計14回のパーティーをやりました。おかげで外国人アーティストから、日本人がこんなにパーティー好きとは知らなかった、と驚かれました。」今は、まったくの自然体で接している。全体の姿勢だけ決めて、細かい打ち合わせもしない。ホストファミリーが、食べ物やベッドやトイレの心配を持ちかけても、特別なことはしないでいい、とアドバイスしている。「エントリー制で、希望するアーティストが来ているのだから、客扱いはせず、文字どおりアットホームにやりましょう、と言うのです。」

90日間の滞在中、市民とさまざまな交流が行なわれる。工房へ通う道で知り合った市民にお茶に招かれたり、近所の住人が工房に果物を持ってきたり、また町内会にも参加して、自国の話をしてもらい、気づいたら仕事の話になっていた、などということもあるそうだ。小学校の図工の授業で教えたり、ボランティアの案内で旅行に出かけることもある。普段の日本を見、普段着の日本人に接することで、アーティストたちの日本観も変化するという。「日本は全員コンピューターを駆使していると思い込んでいたクロアチアの人もしましたし、日本人は所得が高く、贅沢な暮らしをしていると思い込んでいたなど、日本理解にギャップがある。ですから逆に普通の日本人の暮らしを見てもらいたいのです。」

こうした美濃市民の受け入れは、アーティストたちにも好評だという。「美濃に行けてラッキーだった」「本当の日本を見た。伝統のある町で仕事できたことは、とてもうれしい」といった感想が寄せられる。そして帰り際に作品作りのための和紙を買い込み、自国で和紙の展示会を開くこともあるそうだ。また、アーティストに刺激を受けて、海外に留学する子どもたちも



紙すき研修



工房前で集合したアーティストとボランティア

出てきたし、アーティストに会いに外国へ行く人もいるという。「メールで頻りにやりとりしている市民もいますし。美濃に滞在したアーティストが、自分のホームページで美濃和紙を宣伝してくれたりもしています。アーティストが帰国した後もつながりがあるので、9.11のテロのときには、ニューヨークに住むアーティストのことが心配でしたね。今までまったく関係がな

かった世界の出来事が、最近とても身近なものになってきました」

アーティストが美濃を友人たちに紹介してくれるため、友だちの友だちがやってくる傾向もある。「友だちに紹介するくらいだから、きっと本人もいい経験をしたんだと思います。嫌だったら、紹介しないですよ。飾らない交流は、静かに共感を呼んでいるようだ。

## 青田 昌秋

(北方圏国際シンポジウム実行委員会委員長・北海道大学名誉教授)

# 北方圏国際シンポジウム実行委員会 流氷が紋別に与えるもの

### 団体概要

北方圏国際シンポジウム実行委員会

代表者：委員長 青田 昌秋

設立年/設立地：1985年/北海道紋別市

ホームページ：

[http://www.ohotuku26.or.jp/monbetu/19\\_sympo/19sympo.top.htm](http://www.ohotuku26.or.jp/monbetu/19_sympo/19sympo.top.htm)

### 市民が作る国際シンポジウム

北海道オホーツク海沿岸は、北半球で流氷が着岸する最南端とされる。流氷が着岸すると海は閉ざされ、寒くて暗いイメージがあるが、実は流氷が地球規模の海水循環の駆動力となって大気循環にも大きな影響を与え、さらに流氷がプランクトンを育てて海を豊かにしている。人口2万8000人のオホーツク海に面したこの町で、毎年国際シンポジウムが開催され、流氷が漂着する国々から多くの学者が訪れる。シンポジウムは、市民の支えにより、今年で19回目を迎える。

紋別市にある北海道大学低温科学研究所流氷研究施設（流氷研）の3代目の施設長に就任した1984年、青田さんはアラスカで開かれた流氷に関する会合に参加。そこで、流氷が着岸する国が集まり共同研究を進めていこうと挨拶した。亡くなった2代目施設長、田畑忠司教授の追悼も兼ねて、2年後に、紋別市でシンポジウムを開催することになった。しかし研究員とスタッ



オープニングで学者たちにプレゼントを渡す園児

フ合わせて10人に満たない流氷研だけでは国際シンポジウムなど、とてもできない。そこで市民に協力を求めたところ、みな快く協力・応援してくれた。そして受付、接待、会場設営、記録、通訳ボランティアなどを引き受けてくれたおかげで、8名のアメリカ人と2名の中国人が参加した3日間のシンポジウムを無事に開催することができた。参加人数も延べ2500人を集め、成功裏に終わった。「3万人に満たない小さな町で国際シンポジウムをやること自体、無茶なこと。参加した先輩たちからも、続けるのは無謀だと言われましたし、私も1回限りと考えていました」。ところが、市民やボランティアから「続けてほしい」という声が上がリ、その声に押されるように翌年も開催することになった。

「学者だけの学術専門会議にはせず、一般市民にも流氷について理解してもらうために、わかりやすい公開講座も同時に開催しました」。流氷の町に住んでいても、流氷のことをよく知らない人は多かった。公開講座では、「オホーツク海の海況とホタテ貝毒の発生について」や「ナマコの栽培漁業について」など、市民にも関係のあるテーマで講演をし、さらに子どもたちにも「流氷ってなんだろう」といったテーマで、自分たちが住む紋別の海をわかりやすく紹介した。この子どもシンポジウムには、紋別市の小学生が全員参加する。「公開講座を聞いて、とても面白かったので、さらに興味を持ち、学術シンポジウムに参加する一般市民も年々増えています。シンポジウムという自己満足と思われがちですが、紋別市民はエンjoyしてきています



内外から集まる学者たち。市民の姿も見える

し、さらにもっともっと楽しいものなんだということを発信していきたいですね。」

流氷に関する国からの参加は、ロシア、フィンランド、韓国、オーストラリア、イタリアなど。海外からは、10～30人が参加する。通常、ニューヨークや上海など大都市で開催される国際シンポジウムだが、町を挙げての紋別市民の接待に、「これだけ市民を巻き込んだ活気のあるシンポジウムは、世界でも珍しい」と、毎年必ず訪れるファンも多い。通訳ボランティアを第2回目から続けている駒屋紀一郎さんは、「最初のころは、市民も慣れていないので、恥ずかしがって話もあまりしなかったのですが、最近は、顔なじみの学者と活発に話をするようになったので、忙しくなりました」とうれしい悲鳴だ。通訳言語の基本は英語で、帰国子女や大学生、高校の英語の教師などが中心となって活躍する。通訳ボランティア代表の駒屋さんも、30年前に、2年近くハワイに住んでいたため、英語を忘れないように、また自分が楽しむために参加しているという。なかには、戦後サハリンで捕虜となり、そのときに覚えたロシア語を使って通訳をしているボランティアもいるという。「通訳といっても間違いなく完璧にやろうと思わずに、使命感を持たなくてもいいから、一緒にエンジョイしましょう」という姿勢で臨むという。

### 故郷を誇りとする子どもたち

接待するボランティアは延べ200～300人。今では、ボランティアの代表が集まり、大体の役割分担を決めるだけで、滞りなく進行できるようになった。記念レセプション、学術シンポジウム、公開講座、フォーラム、さよならパーティー、

そして1泊2日のエクスカージョンで、近場の温泉なども楽しんでもらう。さらに毎年、登山家の今井通子さんや女優の和泉雅子さん、作家のC.W.ニコルさんといった特別ゲストを招いた講演会も開かれる。そして外国の学者たちに人気があるのは、流氷がもたらした恵みの幸、エビ、カニ、ホタテなどをふんだんに使った料理だという。「寿司も大好物だし、カラオケも大好き。みなさんとも喜んでくれます」。同じものを食べ、一緒に歌えば、心も通じる。シンポジウム開催中は、静かな紋別に活気があふれる。「疲れたら止めよう、と思っているのですが、市民から続けてくれと熱望されるので、やめられません」。

シンポジウムを始めたときには、まだ小学生だった子どもたちも、すでに青年となった。「先日、寒風の中、流氷が見える海岸に若者が2人たたずんでいました。何気なく近づいてみると、紋別出身と思われる若者が、もう一人の友だちに向かって、流氷のことを説明しているんです。誇らしげに。これは、うれしかったですね」。青田さんは、大切なのは明日を担う子どもたちだという。子どもが誇りを持てるような故郷であってほしい。その願いは、確実に次の世代に受け継がれているようだ。



歓迎パーティーで市民と交流

## ごあいさつ

平成4年より、国際文化交流の分野でご活躍の全国各地の方々を対象として、国際交流に関する情報を発信してきました「文化事業通信」も、大きな節目を迎えることになりました。

昨年10月より独立行政法人国際交流基金として新たなスタートを切ったのを契機に、きたる4月より「国際交流基金情報センター」が開設される予定となっています。情報センターは、国際文化交流のいっそうの前進、とりわけ国民の皆様へのサービス強化の観点から、国際交流に関する情報の収集と提供、調査研究、国際交流の担い手に対する支援を行なう組織として、積極的に活動していきます。これに伴い、

国際交流相談室は情報センターに統合されるとともに、「文化事業通信」の内容は、国際交流に携わるの方々にとって有益な情報を盛り込み、構成を刷新した機関誌「国際交流」に引き継がれていくこととなります。情報センターに関する詳しい情報や、「国際交流」のご購読方法につきましては、今後、国際交流基金ウェブサイト [www.jpff.go.jp](http://www.jpff.go.jp) 上にてご案内させていただきます。国際交流基金の事業情報につきましては、ウェブサイト上から「メール配信サービス」の登録も行なえますので、ぜひご利用ください。

読者の皆様には長い間のご支援、誠にありがとうございました。

発行：  
独立行政法人国際交流基金  
国際交流相談室  
平成16年3月発行  
〒107-6021  
東京都港区赤坂1-12-32  
アーク森ビル21F  
Tel : 03-5562-3538  
Fax : 03-5562-3503  
e-mail: [bjtushin@jpf.go.jp](mailto:bjtushin@jpf.go.jp)